

2017年7月31日(月) 第15回「聖書で読み解く映画カフェ」上映作品

「シティ・オブ・エンジェル」の見どころ

City of Angels 1998年製作 アメリカ映画 114分

ストーリー

ここは大昔から無数の天使たちが住む街、ロサンゼルスCity of Angels Los Angeles(スペイン語で“天使たち”)。

セスはそこに住み、死者を天国へ導き、悲しむ者に寄り添う天使の一人。今もある患者を天国へ導いたセスは、その医師である心臓外科医のマギーに惹かれてしまう。患者が死んでしまったことで自分を責め、悲しむマギーを励まそうと、彼女に寄り添うセス。だが、落ち込むばかりのマギーには、そんなセスの存在も、同僚で恋人のジョーダンの励ましも通じなかった。自信のないまま、マギーは新たな患者、メッシンジャーの手術に向かおうとしていた。何とか彼女を救おうと思い立ったセスは、どうとう天使の掟を破って彼女に姿を見せ、「君は頑張った。彼は幸せだったよ」と励ます。見ず知らずの男の出現に戸惑うマギーだが、不思議と彼の存在が気になるのだった。

無事にメッシンジャーの手術を終えたマギーは自信を取り戻し、いつの間にかセスのことが頭を離れなくなっていた。そしてセスは再び彼女の前に姿を現す。「頭で考えるのではなく、感じることを信じろ」と言うセスの言葉に、マギーはハッとす。2人は多くの天使たちの視線から逃げ、2人だけの時間を過ごす。2人の互いへの思いはどんどん高まっていった。図書館での、ヘミングウェイの『移動祝祭日』(A Moveable Feast)が仲を取り持つ。

ある日、マギーの患者、メッシンジャーが見えないはずのセスに声をかける。彼は、驚くセスに、自分も昔は天使だったが、人間の女性(現在の妻)を好きになり、彼女と結ばれるために、それを捨てて人間になったことを告げる。メッシンジャーは、セスのマジ

ーに対する気持ちを見抜き、人間になる方法を教える。それは高い所から地上に落ちること。セスは、人間になればマギーを体で感じるができると思う一方で、「今いる世界があまりに美しく…」と、天使を捨てて失うものの大きさに悩む。マギーもまた、2人の関係をもう一步踏み出さないセスに不安を抱く。そして、どうとうセスの正体に気づいてしまう。セスを責め、別れを告げたマギーは、恋人のジョーダンのプロポーズを受けようとしていた。彼女は、自分が愛しているのはジョーダンではなくセスだと分かっていたが、今の自分には、同じように感じ合える相手と一緒にいることが必要だと思ったのだ。

2人が本当に結ばれる方法は1つしかなかった。それは、セスが永遠の命を捨て、人間になること。苦悩の末、セスはようやく決心し、高層ビルから身を投げる。「これが血か!」と、人間になった感動をかみ締めるセス。あとはマギーを追いかけて、自分の気持ちを伝えるだけだ。セスはタホー湖の別荘に彼女を探し当て、ついに結ばれた2人は、夢に見た**よこ**の喜びの時を過ごす。

だが、喜びもつかの間、自転車で買い物に出かけたマギーが事故に遭って重体に。「天使を見ちゃいけない」というが、亡くなる。嘆き悲しむセスだったが、かつての仲間であった天使カシエルに、たとえ一夜でも人間として愛する人と過ごせて幸せだった、永遠の命を捨てても悔いはないと語り、このまま人間として生きて行くことを決意する。

キャスト

ニコラス・ケイジ(セス) (「フェイス・オフ」)
メグ・ライアン(マギー) (「恋に溺れて」)
デニス・フランツ(メッシンジャー) (「ダイハード 2」)、
アンドレ・ブラウアー(天使カシエル) (「ホミサイド 殺人捜査課」)

スタッフ

監督: ブラッド・シルバーリング(キャスパー)
脚本: デイナ・スティーヴンズ
製作: ドーン・スティール(「悪魔を憐れむ歌」「どんな時も」)
製作総指揮: アーノン・ミルチャン(L.A.コンフィデンシャル)、チャールズ・ニューワース(「フェノミン」)、ロバート・カヴァロ(「悪魔を憐れむ歌」)
撮影: ジョン・シール(「イングリッシュ・ペイシエント」「ジャック」)
音楽: ガブリエル・ヤレド(「イングリッシュ・ペイシエント」)
美術: リー・キルヴァート(「クルーシブル」)
編集: リンジー・クリングマン(「マチルダ」)
衣裳: シェイ・カンリフ(「クローン」)

上映前

この映画について

●地上の女性と恋に落ち、人間になることを決めた天使の姿を描いたラブ・ストーリー。
この映画の10年前、1987年製作、フランス・西ドイツ合作、ヴィム・ヴェンダース監督の「ベルリン・天使の詩」のハリウッド版リメイク。
《両作の違い》
*舞台をベルリンからロサンゼルスに移している(この映画のタイトルは、「ロサンゼルス」

を指している。)

*「ベルリン～」は恋をするために人間になりたいというのではなく、長い間様々な人間の人生を見届けてきた天使が哀愁や哲学に苦しみ、永遠の命から解放されたいと思い、結果的に女性に恋をする。

●この映画は、天使と人間の恋愛ファンタジーだが、“有りえない”からと敬遠してはいけない。外科医マギーは目に見える世界しか信じられなかったのが、手術の失敗という不可抗力的な出来事を通し、見えない世界の存在に気づいていく。彼女はある意味、この世(日本人)の99パーセントの人間の“代表者”。彼女がどのように“証”の世界から“信”の世界に目が開かれていくかというプロセスは、私たちが証しをするうえでも、大いに参考になる。

この映画での天使の特徴《クイズ》

●この秋公開の「アメイジング・ジャーニー 神の小屋より」では、なんと、三位一体の神が、人間として登場！(しかも「聖霊」は女性で。)この「シティ～」でも、人間として登場。それは観客には見えるが(でない映画にならない！)、登場人物には見えず、あとで、マギーにだけ姿を現す。でもそれがあくまで”天使”であり、”人間”ではないと分からせるため、後半、人間になったセス自身が、それまで持っていなかったものに気づくなど、ストーリー上、いろいろ工夫している。それをピックアップしてみてください。

天使は霊的存在なので;

- ① 色彩感覚、臭覚、味覚(空腹感)、触覚(痛み)がない。
- ② 涙が出ない(泣くプロセスを知らない)。
- ③ 血が出ない。
- ④ 呼吸しない。
- ⑤ 人間に姿を見せてはいけないので、カメラに映らない。(だがこの掟を破れば、

姿を見せられる。)

⑥ 羽がなく、色が白でなく、黒ずくめ。

⑦ 天上の音楽が聞こえる。

●さて、ニコラス・ケイジの天使像は、あなたのイメージどおり？

●いずれにせよ、大切なのは、“霊的人格(天使格！)”としての天使の存在と行動(三位一体の神からのみ言葉の伝達。私たちのそば近くに寄り添い、必要な慰めと励ましを与える。危急の時の速やかな助け。)を、もっと実感すること。

上映後

《クイズの答え》

●この秋公開の「アメイジング・ジャーニー 神の小屋より」では、なんと、三位一体の神が、人間として登場！(しかも「聖霊」は女性で。)この「シティ〜」でも、人間として登場。それは観客には見えるが(でないと映画にならない！)、登場人物には見えず、あとで、マギーにだけ姿を現す。でもそれがあくまで”天使”であり、”人間”ではないと分らせるため、後半、人間になったセス自身が、それまで持っていなかったものに気づくなど、ストーリー上、いろいろ工夫している。それをピックアップしてみてください。

●天使にないもの:

天使は霊的存在なので;

⑧ 色彩感覚、臭覚、味覚(空腹感)、触覚(痛み)がない。

⑨ 涙が出ない(泣くプロセスを知らない)。

⑩ 血が出ない。

⑪ 呼吸しない。

⑫ 人間に姿を見せてはいけないので、カメラに映らない。(だがこの掟を破れば、姿を見せられる。)

⑬ 羽がなく、色が白でなく、黒ずくめ(ホームレス?!)。

⑭ 天上の音楽が聞こえる。

●さて、ニコラス・ケイジの天使像は、あなたのイメージどおり？

この映画のセリフを聖書で読み解く

① **天使の名前「セス Seth」:** 旧約聖書「創世記」の4章25節に登場する。聖書の表記は新改訳では「セツ」、新共同訳では「セト」。この人物は、人類の祖、アダムとエバの間に生まれた子供の一人で、最初に生まれたカインとアベルの弟になる。カインが弟アベルを殺してしまったので、その代わりに神が与えられたもう一人の弟だ。この両親と、2人の息子カインとセツから、人類は増え広がっていくのだが、興味深いのは、創世記6章2節に出てくる「神の子」と「人の娘たち」というのは、両者の善悪の性格の違いから考えて、前者がこのセツの家系、後者がカインの家系と考えられることだ。だとすると、この「神の子セツ」から「天使セス」のキャラクターを作ったことは、それなりの聖書的背景があることが分かるだろう。

② **死の現実を受け入れられるのは、“摂理信仰”しかない:**

スーザン「ママは分かんない(映画では「ママ 寂しくなるわ」 She won't understand.)

セス「分かるさー」「いつか She will, someday.」

「彼女の母が今は悲しみと絶望の極みにあっても、時が来れば、彼女が天使に連れられて天国に行ったこと(つまり、死も苦しみもない状態に移されたこと)、それが彼女にとって一番よかったのだということが分かる日が来る。」ということ。キリスト教では、このような理解を「摂理信仰」という。愛する者の死を受け入れられるのは、この道しかないかもしれない。

これは、やがて、結ばれた喜びもつかの間、マギーを失う人間となったセスについて

も言えることだ。

●「神はどんな場合でも、ご自身の最善以下のことはなさらない」と、ひたすらに信じる
こと。

③ 医師が戦うべき本当の相手は”闇の世の主権者”:

マギー「患者の命を救うため闘うんでしょ？ でも闘う相手は誰？ ...who it is we're fighting with?」fight for peopleは医師が闘う“意味、目的”を言っているが、fight with whom、闘う“相手”を問うている。これは、それまで科学万能を信じて、人間の築いた医学の力で多くの患者を救ってきたマギーが、医学的処置では万全だった患者が死んだことによって、初めて“見えざる世界”を考えるようになったことを示す重要なセリフ。直接的な相手は“死”だが、更には医学の限界を超えて人間に死をもたらす、“闇の世界の絶対的な主権者の存在”まで考え始めていると言えよう。

④ 神はあらゆる被造物(天使、人間)に“自由意志 Free will”を与えられた:

ここで Messenger は、「人間がそうなら、やつらよりはるかに出来のいい俺たちだって…」と、この free will を働かせるようセスを説きつけている。これがまた、この映画がキリスト教・聖書ルーツである点の一つで、Messenger 自身が、実はこの free will を悪く働かせて天から落ちてしまった“墮天使”のモデルなのだ(旧約聖書イザヤ書 14 章 12-15)。“いと高き方”(神)のようになりたいと、天に昇ろうとして、神の怒りに触れて地の底に突き落とされた“暁の子、明けの明星”がそれだ。違うところは、Messenger は人間になったが、墮天使は悪の根源、悪魔(サタン)になったという点だ。

聖書は、「神は人間を“自由意志”を持った存在として創造した」と教える。ロボットやイエスマンのように創られなかったということだ。人間は、この自由意志を与えられたからこそ、それに従って神の戒めに背いて罪を犯し、樂園を追われたが、またその促すところに従って、再び神のもとに帰ることもできる。キリスト教の教えがどんなに素晴らしいも

のであっても、それを信じるように強制することは、神のみ心ではない。神はあくまでも忍耐をもって、人間が与えられた自由意志を正しく働かせることを待っておられる。そのときに、人間はすばらしい祝福を与えられる、と聖書は約束する。自由意志が重荷ではなくて恵みのたまものであるゆえんだ。

⑤ 愛は失うことを恐れない。

メッシンジャー「彼には“恐れ”も“痛み”や“飢え”の感覚もない 日が昇る“音楽”を聴くでも君への愛から全て捨てる気だ それほど君を愛してるんだ He loves you that much」
マギー「分からないわ」

メッシンジャー「落ちればいい “天使”の自分を捨てるのさ “永遠”を捨てて俺たち人間になれるんだ He can fall...give up his existence...give up eternity and become one of us.」

that muchは「それほどに」という意味だが、「どれほど」だろう？ そう、「恐れ」「痛み」「飢え」の苦労を背負い込み、天上の音楽が聴ける(=永遠の命)“特権”を放棄するという大きな犠牲を払うほどに、ということだ。本当の愛とはそういうもの。“人間大好き”で天使を捨てたメッシンジャーとも違って、セスは純粋に“愛”のゆえに人間になろうとした。そのために失うものを恐れなかった。

(Iヨハネ 4:18)「愛には恐れがありません。全き愛は恐れを締め出します。なぜなら恐れには刑罰が伴っているからです。恐れる者の愛は、全きものとなっていないのです。」
(コロサイ 3:14)「愛は全てを完全に結ぶ帯である。」

●天使セスは、人間の女性マギーを愛するあまり、全てを捨てて人間になり、初めて彼女に触れ、たとえ一瞬でも、彼女と身も心も一つになった。彼は、彼女を失っても、決して自分の行為を後悔せず、その“一瞬の愛の感触”を胸に生きていく。

●このセスの愛は、キリストを人としてこの世に送られた、神の愛の型である。キリスト教・聖書の中心メッセージは、「人間を創造した神は、人間に対する愛のゆえに、ご自分のただ一人のみ子イエス・キリストを、人間として地上に送られた。キリストは、天上の栄光を捨てて人となり、人間としての痛み、苦しみをすべて味わい、最後には生きとし生ける者すべての罪を負って、十字架の上で命を捨てられた。この愛の内に生かされていることを感謝したい。

●いずれにせよ、大切なのは、“靈的人格(天使格！)”としての天使の存在と行動(三位一体の神からのみ言葉の伝達、私たちや、死にゆく人のそば近くに寄り添い、必要な慰めと励ましを与える。危急の時の速やかな助け。)を、もっと実感すること。

★聖書で読み解く映画って、本当にいいものですね。

ではまた、次回お会いしましょう。ハレルヤ！ハレルヤ！ ハレルヤ！